

里山グループ



エコグループ

◆それぞれの里山

池山 良武

「ならやまプロジェクト」の活動日は楽しみである一方で、主治医の診察が木曜日になっていることにプラスして季節的には、往復7時間もかかる自称「丹後ファーム」の維持管理に追われることもあって、ご無沙汰すること多々である。

ならやまプロジェクトと丹後ファームの違いと、共通点が幾つかある。

まず、多人数で活動することと、個人である。山、景観、ビオトープ、パトロール、花、果樹など、グループ分担は無いので一人で全てに関わらなければならない。草刈り、水路の整備も手が抜けない。水路には他ではあまり見られなくなったアカハライモリも生息しており、住まいを襲わないよう気遣っての作業もある。大きな違いは鳥獣被害対策である。ならやまプロジェクトのカラス、鹿は序の口で、猿、猪、熊対策である。猿にカボチャを、猪にジャガイモ・サツマイモ・ヤマイモを、熊に柿・栗をやられる。完全防備など不可能で、彼らに成果物をどれだけ残してもらえるかのレベルである。周辺の農家では、電気柵や熊捕獲の檻を仕掛けていますが、全ての鳥獣に有効な手立てはない。

性懲りも無く「丹後ファーム」に通う心境は何か。自問してみるが、明確には出てこない。多分誰もが持っている土への愛着、習性のようなものではないかと思う。

「骨折り損のくたびれもうけ」何故そこまでして頑張るのと思うこともある。

ならやまプロジェクトには、2時間近くもかけて遠方から来る方もあると聞く。それでも一日をここで過ごし疲れはするが、清々しい気持ちで帰るときに味わうそれは、今日を生きている有難さを体が実感するからではないか。

◆エール

岸谷 和代

「米は、字のとおり人の手を88回通って一粒の米となり、畑の作物は、人の足音を肥やしに大きくなる」と言って畑仕事に精出していた父。縁あってならやまに通って12年。この頃よくこの言葉を思い出す。春の訪れと共にやってきたコロナと異常気象は私の心に不安をはこんできた。

「お天とうさん任せ」と言われる畑作業も、時は待ってくれず、臨時作業日が続いた。9月初め今年の大根の作付け作業が始まり、畑は天の川、品種はY R くらまの青首大根と決定。Y Rとは萎黄病に強い品種に付いている略記号。くらまは、肌が滑らかで艶があり、肉質は極めて優れる、と種袋の能書にある。「大根十耕」ふかふかの床を作る人。細く長い畝に一粒一粒丁寧に種を落としていく人。「しっかり芽を出しておくれ」とカ水をたっぷりやる人。皆の思いは一つ。7日後、見事な芽出しで応えてくれた健気な姿に一同大感激。双葉から本葉へと作業する手も軽やかに土寄せ、間引き、追肥と進む。

「どう？大きくなった？」の問いかけに「うん！」と白い茎をみせる。こんな楽しい問答を重ねて90日。今、天の川には300本余のくらまが出番を待っている。冬の寒さに晒された大根は甘味が深くきめ細やかでとても美味しい。丸大根は、煮物に。紅心大根は、生食で。くらまは、千両役者。

植物の成長は心を豊かにしてくれ、育てる喜び、味わう楽しさを与えてくれる。励まし励まされ、コロナ禍の中、野菜達に元気をもらった一年であった。

